巻頭エッセイ

複数存在する真実
――Alternative facts

松尾弐之

アメリカ史の授業を長年にわたり担当したが，自分が教壇に立ってのべる事は間違いのない真実なのか，という疑念にたえず付きまとわれていた。歴史上の出来事は動かしがたい真実に思えるが，実はそうではないからだ。たとえば北アメリカの先住民は採集狩猟文化のもとにあったとするのが定説だが，マヤ文明に匹敵する高度な農耕文明がミシシッピ川岸に存在したことが明らかになってきた。

第二次世界大戦中のフランクリン・ローズベルト大統領は，自由と民主主義のために戦ったが，ホワイトハウスから圧力をかけて息子の商売の便益を図った事も知られるようになった。ウォーターゲート事件で失脚したリチャード・ニクソン大統領には，心理学の手法を用いた新しい解釈が出ている。

芥川龍之介の作品に『藪のなか』という佳作がある。殺人と強姦という事件をめぐって目撃者や関係者７人が口を開くのだが，それぞれの語る内容が微妙にずれていて，何が本当か定かでない。同じ事柄でも複数の視点から描くとこういうことが起こりがちで，それを「内的多元焦点化」と言うのだそうだ。白黒で割り切れない錯綜した真実は，芸術家などの想像を掻き立てるらしく，『羅生門』『去年マリエンバードで』などの映画製作のヒントになった。

あやふやな事実があるというのは目新しい事ではない。戦争中の大本営発表もそうだが，企業の業績など大企業の言う事を鵜呑みにできないとする雰囲気もある。現代の若者の多くは新聞の記事をあまり信じない。客観的な事実が重視されない「ポスト・トゥルース」の時代だなどとも言われる。

などと考えていたら，今年の初めにドナルド・トランプ大統領が誕生した。選挙運動中から根拠が希薄な発言が多く，大統領となってもこの傾向は変わらない。そしてトランプ政権は，思いもかけない知的なざわめきを引き起こしている。大統領補佐官ケリーアン・コンウェイが，大統領就任式を見物した観衆の頭数をめぐる言い争いのなかで，「それは alternative facts でしょ」と言い放ったのである。alternative とは「どちらか１つを選ぶべき」「代わりの」という意味の形容詞だが，ここでは「別の見方をすれば」くらいの表現だろう。

コンウェイの発言を受けて，事実に別の見方があるとする考えはジョージ・オーウェルの近未来小説『1984年』の主要テーマだという指摘が，「ニューヨーク・タイムズ」でなされた。そこでこの小説を入手しようとする騒ぎとなった。通販サイトのアマゾン（アメリカ）では３日間でこの本が9,500パーセントの売り上げ増となり，短期間で在庫がなくなった。版元のペンギンブックスは急遽75,000冊の増刷を決めたという。

オルタナティブ・ファクツとは，虚偽のことだと決め付けるメディアもあるが，ワシントンで法学を教えるロバート・ストーカー教授によれば，この表現は法律用語だという。つまり法律の世界でも複眼的な事実の存在が認められている。

今回，大修館書店から『列伝アメリカ史』を出版する事になったが，教壇からの一方的発言を反省して，できるだけ多様な視点から15人の人物を取り上げ，複雑性のなかにある歴史を描こうとした。もちろん最終章にはトランプ大統領に登場願った。著作がどういう種類の真実として認められるか，今から楽しみでかつ不安なことである。

（まつお　かずゆき・上智大学名誉教授）